

芦峯寺村

芦峯寺は立山信仰とともに発展し、江戸時代（1603-1867 年）には立山巡礼の流行とともに栄えました。立山の宗教的・文化的歴史を理解する上で、今でも重要な場所です。

修験者の村落から寺院の町へ

芦峯寺は、8 世紀に佐伯有頼によって創設された修行の場として始まりました。巡礼者の数が時間の経過により増えるにつれて、寺院やその近くに巡礼者用の宿坊をもつ寺町になりました。19 世紀初頭の絵入り地図には、33 の巡礼宿が立ち並ぶ参道で結ばれた、東西に分かれた境内を持つ大規模な寺院群が描かれています。芦峯寺はもともと立山中宮寺として知られ、19 世紀後半に明治政府が仏教廃絶のために導入した政策に従って芦峯寺大山神社となりました。

19 世紀から 20 世紀にかけて日本が近代化するにつれ、立山信仰の人気は衰え、宿坊の宿泊施設としての営業は終了してしまいました。以前の宿坊のうち二棟は、今では一般の利用に供されています。特に教算坊はとても状態良く保存されています。この教算坊は、1820 年頃に建立され、壁に囲まれた敷地内には美しい伝統的な庭園があります。部屋には家具が置かれ、立山の神々を祭る祭壇や、立山曼荼羅を含む絵巻物があります。

名所旧跡

立山博物館は村の中心部にあり、礼拝所としての立山の歴史が詳しく紹介されています。展示では、立山の地質学的な歴史、立山信仰の発展と今日まで続く布橋灌頂会の儀式などが紹介されています。

芦峯寺大山神社の境内にそびえ立つ古杉の間を歩くと、立山を中心に発展した信仰の歴史と規模を感じることができます。それぞれのお堂は、山の峰に宿ると信じられている神々に捧げられたものです。

芦峯寺大山神社の東側には、かつて立山中宮寺に属していた遺跡群があります。これらには、仏教の地獄の王を祀る閻魔堂、生者の世界と冥界死者の世界を隔て、仏教の冥界に通じる三途の川に架かる橋を表す布橋が含まれます。閻魔堂には 60 体以上の仏像があり、重要文化財に指定されています。

立山信仰の信者は閻魔堂から巡礼を始め、布橋を渡って死後の世界に行くことを象徴としていました。そして、立山の霊峰を訪れ、霊的に生まれ変わるため、魂の浄化を行ったのです。

富山県立立山博物館が運営する屋外施設、立山まんだら遊苑では、光と音の装置が仏教

の冥界を巡る巡礼の体験と魂の旅を再現しています。立山まんだら遊苑は、布橋から徒歩
10分のところにあります。